



志賀直哉集

現代文豪名作全集



河出書房

目次

● 荒	絹		三
● 老	人		七
● 母の死と新しい母			一〇
● 正義	派		一六
● 清兵衛と瓢箪			二一
● 出来事			二五
● 城の崎にて			二九
● 好人物の夫婦			三四
● 小僧の神様			四三
● 雪の日			五〇

雪の遠足……………五四

焚火……………五九

眞鶴……………六七

雨蛙……………七二

轉生……………七九

矢島柳堂……………八三

山科の記憶……………九七

痴情……………一〇一

山形……………一〇八

菰野……………一一四

邦子……………一二三

豐年蟲……………一四二

早春の旅	一五一
淋しき生涯	一七一
秋 風	一八八
自 轉 車	一九六
朝の試寫會	二〇三
暗夜行路	二一〇
年 譜	四七七
解 說	青 野 季 吉

志賀直哉集

荒 絹

昔々或山に美しい一人の女神が住んで居た。女神は美の神で、戀の神で、さうして妬みの神であつた。

晴れた日に頂きを望み得る程の地方に住む若者は、戀人の出來た日に皆其戀の成就を此女神に願はぬ者はなかつた。戀は成就する。二人は女神に感謝する。然し間もなく二人は有頂天になる。二人は今二人だけになる。二人はもう女神の恩恵を忘れて居る。此時に戀の神は妬みの神に變る。思はぬ禍が不意に二人の上に落ちて来る。其戀は遂に悲劇に終る。

かう云ふ例を幾度か見て居る老人達は悲し氣に頭を振つて溜息をつく。彼等は有頂天になつて行く二人を見る時に既に其悲しい終りをも見て居た。然し有頂天になつて行く若い二人を遮る力はある老人達にはなかつた。老人達は斷崖へ急ぐ二人を見す／＼に只腕を拱いて見てゐるより仕方がなかつた。さうして斷崖から逆落しに落ちて行く二人を見ながらも、只悲し氣に頭を振るより仕方がなかつた。

茲に此山の麓に阿陀仁と云ふ美しい一人の牧童が居た。

毎朝阿陀仁は七八頭の牛を連れて山へ登つて来る。牛が草を食ふ間に、阿陀仁も一緒に草を刈つた。牛が寝て、靜かに反芻をする時に阿陀仁は快く其處に晝寢をした。日が山の頂きに隠れる頃、牛は互に呼び交す。其聲に阿陀仁は眼を醒して、刈つた草を或牛の背に積み上げる。そして日の暮れきらぬ内に麓へ歸つて行く。

山には美しい花が多かつた。木の花も、草の花も、阿陀仁はさういふ花を澤山につみ取つた。そしてそれで美しい花束を幾つも作り、中でも最も美しい花束を女神の祭壇に生けて、あとを麓の若い娘達に持つて行くのを例として居た。

三四年経つた。阿陀仁は段々に美しくなつた。山の女神はいつか此若者を戀するやうになつた。然し其時は既に若者にも一人の戀人が出來て居た。それは荒絹と云ふ機の名人で、年は阿陀仁より一つ二つ上で、山の女神にも劣らぬ程に美しい娘であつた。

阿陀仁が荒絹を戀するやうになつてからは朝の内だけは草を刈り、花を摘みなどしてゐても、晝過ぎるといそ／＼と牛を追ひ／＼麓へ下つて行くやうになつた。それまでは摘んだ花の一番美しい一束を毎時女神へ捧げて行つたのが、今は一番美しい一束を別にして、次の一束を捧げて行くやうになつた。

女神の心は樂しまなかつた。さうして女神は或日、使つて居る岩頭と云ふ山男、——此山男はかなりの年をしなが

に悪戯者で、夜になるとよく麓の村々をあさり歩き、羊や、鶏や、或時は魚の肉などを盗み、又或時は酒をも盗んで来るのを仕事^{しごと}のやうにしてゐる奴であつた。――女神は此山男から阿陀仁と荒絹との戀を聞いた。さうして荒絹の伯父にあたる年老いた隠者の入智恵で此戀は最初から絶對に

女神には秘めて居ると云ふ事を聞いた。其上今荒絹は一念を凝らして美しい一帳のとばりを織つて居ると云ふ事、そのとばりの中に阿陀仁と二人入る爲、その美しいとばりに包まれた二人は世の如何なる美しい物にも再び眼をまどはされる事のない爲に、今荒絹は一心にそれを織つて居ると云ふ事を聞いた。女神には強い妬み心があつた。

女神は荒絹の織つてゐる其美しいとばりを見たいと思つた。或晩、それは月のいい晩であつた。女神は岩頭の案内で、初めて山を降りて往つた。

夜は更けて居た。森々ではふくらふが啼いて居た。村の家々では皆灯を消してもう寢靜まつて居た。只一軒彼方に窓一ぱいにあかくと灯の映つてゐる家があつた。それが荒絹の家である。

女神は岩頭を其處に残して一人靜かに進んで行つた。近よるにつれ、女神は美しい唄の聲を聞いた。機^{はた}のトン／＼と云ふ響がそれに伴奏した。魅するやうな調子で戀の切ない心を唄つて居る。女神は暫くそれに聴き惚れた。然し女神の心は一層強い嫉妬に燃えた。

女神は覺悟を忍ばせて窓の下に近よつた。さうしてそつ

と隙間から中を覗いて見た。女神は先づ機から流れ出て、床を敷き、更に彼方の壁へ其端をかけられた、幅の廣い美しい織物を見た。それにはあらゆる美しい花と美しい小鳥とで、少女の戀する心が織り込まれてあつた。

女神は次に夢見るやうな、うつとりとした眼の美しい少女の姿を見た。豊かな頬、張り切つた胸、丸味を持つた長い指、其若々しさには女神の美も到底及ばないやうに思はれた。

女神は最後にその邊、床一ぱいに撒き散らされた山の美しい花々を見た。

女神の心は二重三重の嫉妬に燃えた。女神はこんな美しい少女を初めて見た。こんな美しい織物を初めて見た。そして阿陀仁との戀。女神は若し此美しいとばりが完成すれば、もうどんな事をしてもおの牧童を再び此少女から引き離す事は出来ない^{ない}と考へた。そして女神はどうかして此とばりを完成させぬやうにせねばならぬと決心した。

何事も知らない荒絹は夜となく晝となく、心に戀の燃え立つ時、直ぐ機に坐つた。とばりはもう三分の二以上出来て居た。あと三分の一、それが出来上つた日に伯父の隠者は阿陀仁と自分をめあはせて呉れる。それを想ふと荒絹の心は何時も燃え立たずには居なかつた。

阿陀仁は毎日山からの最も美しい一束の花を窓から投げ込んで往つて呉れる。然し隠者の言葉でとばりが完成する迄は一ト言でも二人は話す事を禁じられて居た。阿陀仁は

とばりを隙見するさへ禁じられて居た。

或夜、もう村中寢靜まつた頃、荒絹は一人靜かに機を織つて居ると、不意にいやな寂しさに心を襲はれた。荒絹は機の手を止めて眼を閉ぢた。すると遙か遙か遠い所で何か唄つて居る男のしやがれ聲が聴えて來た。それはかすかで何を云つて居るかは解らなかつた。然し解らぬ儘に何だかいやな氣持をさす節だつた。

それから毎夜其聲は聴えた。其聲は段々に近く聴えて來た。風の向きで時々其文句も聴えた。それは呪ひの不吉な文句だつた。其とばりを織る事を今止めなければ必ず不吉な事が其身に起るぞ、と云ふやうな意味だつた。

呪ひの唄は夜毎に近づくやうに思はれた。身の程もわきまへず、その様などばりを尙織り續けるなら、お前はいまに蜘蛛になる。そんな意味を唄つて居る。

荒絹は段々に苦しくなつて來た。

荒絹はそれが女神の妬みからである事を悟つた。然し荒絹はそれを伯父にも阿陀仁にも打ち明けようとは思はなかつた。若し伯父に打ち明ければ伯父は機を織る事をとめるだらう。

阿陀仁に打ち明けてもそれは同じであらう。そして阿陀仁は機を止めて直ぐ結婚しようと思ふに違ひないと思つた。然し荒絹には此とばりなしの結婚では何時阿陀仁を山の女神に奪ひ取られるかも知れないと云ふ不安があつた。荒絹はどうしても誰にも打ち明けず此とばりを完成させ

ねば置かぬと決心した。

荒絹は兩方の耳の穴に絲くづを固く詰め込んだ。荒絹は殆ど聾者と變りなくなつた。然し一度其耳の底に浸み込んだ不愉快な呪ひの節は耳の中で勝手に尙其唄を唄ひ續けた。或時は無意識に荒絹自身、口の中で其いやな唄を唄つて居る事があつた。

荒絹の身體も精神も段々に衰へて來た。然し荒絹は一日も機を織る事を止めなかつた。荒絹には阿陀仁に對する堪へ性のない戀しい心が發作的に起る事が多くなつた。然し荒絹はそれをヂツと堪へた。そして其苦しい心の儘、とばりの完成を急いだ。荒絹は苦しい戀を紫色の花に織り込むやうになつた。

呪ひの唄は夜毎に烈しくなつて行つた。紫色の花は段々黒味がかつて來た。此頃から荒絹の様子が少しづつ狂はしくなつて行つた。そして今は毎日々々黒い花ばかりを織り込んで居た。小鳥の色も黒かつた。華やかだつたとばりは見ることがない物に變つて行つた。それは丁度美しい布が半分清泥につかつたやうに見えた。

荒絹にはあせる心はあつても機を織る氣力がなくなつた。夕方になるとよくをさをを兩手に持つてぼんやりと軒下立つて空を見上げて居るやうな事が多くなつた。然し阿陀仁は一度も荒絹のさう云ふ姿を見なかつた。そして毎日山を下ると直ぐ美しい花束の一つを窓から投げ込んで歸つて行く。美しい花束は徒らに溜るばかりであつた。

やがて二ヶ月程経つた。餘りにとばり、の出來上る事の遅いのを阿陀仁は不思議に思つた。阿陀仁は隱者を訪ねて見に行く事を頼んだ。隱者も半年餘りして未だ出來ないのは少し長過ぎると考へた。

隱者は中へ入つて見て驚いた。其處に荒絹の姿は見えなかつた。そして部屋の中は蜘蛛の巣で一杯になつて居た。しかも美しいとばりは途中から段々にきたない色に變つて行つて、仕舞は全く泥につかつたやうな色に織り出されてあつた。

窓の隙間から細い絲が戸外へつながつて居た。隱者はそれを頼りに出て見ると何處までもそれは續いて、段々に山の方へ延びて行つた。隱者はついて山へ登つた。そして女神の社まで來ると、其處にむしり取られたやうな荒絹の着物の切れ端が落ちて居るのを見た。

絲は更に山の裏側へ延びて行つた。山の裏側は北向きの陽もあたらず、花も咲かず、小鳥も啼かぬ荒涼たる景色の處だつた。隱者は岩角や木の根につかまりながら中腹まで下りて行つた。そして其處に一つの大きな洞窟を發見した。そして絲の續きはその洞窟へ入つて居た。

隱者は其洞窟の薄暗い奥に荒絹が恐ろしい眼をして此方を見て居るのを見た。荒絹の前には穴一杯の大きさに大きい蜘蛛の巣が張つてあつた。荒絹は未だ何かを織らうとするかのやうに、もう絲のなくなつたをさを持つて其手を兩方に擴げて居た。ギロリと大きく見開いた眼、瘡痍へて妙

に細長く見える手足、薄よごれた皮膚の色、荒絹はもう蜘蛛のやうに見えた。

老人

五十四歳で彼は妻を失つた。それは秋で、長男が工科大学へ入り、長女が三人目の娘を生んだ時であつた。彼は俄かに五つ六つ年寄つたやうに見えた。勇敢な事業家にも何所か衰へる影がさした。——少くも他からはさう見えた。四月して、彼は十年餘り御殿女中をして居た女を後妻に貰つた。後妻は彼の長女より一つ年下で、毎朝襟白粉を忘れぬ女であつた。

若い妻を得た彼は先妻を失つて老い込んだだけの年を取りかへして、尙其上にも若返つたやうに思はれた。彼は十年ぶりて妻と共に芝居を見た。相撲も見つた。山の温泉場に避暑もした。が、それも半年とは續かなかつた。彼は何時か元の勇敢な事業家に還つて居た。

彼の仕事は請負で井戸を掘る事であつた。水利に乏しい地方で彼の鋭い觀察と深い經驗から掘り當てられた吹きぬきが何れ程あるか知れない。彼の發見した鑛泉の爲につまらぬ村が有名な土地になつた所も二三ヶ所ではない。

勇敢な事業家に還つた彼は再び暇なく地方へ出張する身

となつた。最初妻はそれをいやがつて居た。當時長男は大學の近くに下宿して居たが、高等商業學校に通ふ次男は窮屈さうに己れと餘り年の異はない新しい母と共に住まつて居た。

二年程して、彼は或石油會社の顧問として少からぬ報酬を受ける身となつてからは、時々北の其地方へ行くばかりで他へは餘り出なくなつた。

然し五年目に彼は此會社を辭して了つた。それは其所の若い技師が彼の意見を尊重しなかつたからで、重役までが彼よりも新しい學問をした技師を信用するらしく思へたからであつた。此技師は彼の長男より二年後に工科大学を出た男で、その意見を信用する事は彼にはどうしても出来なかつたのである。

其時彼は六十五歳になつて居た。

後妻には子がなかつたから、二人は長男の娘を手元へ呼んで育てた。彼は祖父らしい心になつて其孫娘を慈しんだ。

隱居してからの彼は前からも好きだつた普請道樂に憂身をやつした。それから七年間に僅二百坪足らずの屋敷に、建ててはくづして賣拂ひ、又建ててはくづして賣拂ひ、三度もさう云ふ事をして、其度の損耗は少しも顧みなかつた。

これが最後だと云つて、彼は一年計畫で又新築をくはだてた。それが全く出来上らない内に妻が死んだ。妻の病氣は貧血から來た肺結核で、それと決定つた時に孫娘は長男

の方へ還したから、今は全く孤獨で暮す身となつた。六十九歳になつて居た。

——其後、彼はよく待合に出入するやうになつた。

待合の者も藝者も金銭づく以上に彼に親切だつたが、時には彼が不快を感じないではゐられない事があつた。夜歸する時、電車まで送ると云つて若い藝者がついて來た。竝んで歩いてゐると、擦れ／＼に若者が行き違つた。若者は妙な眼をして二人を見て往つた。かういふ時、若者の心に思ふ事が彼の心に直ぐその影を映すのである。のみならず、竝んでゐる若い女が同じ影を受けて感ずる心持をも彼は感じないではゐられなかつた。そんな感じも青年のやうに烈しくはないが、淡いながら彼の氣分を曇らすには充分であつた。そして彼は停留場の遙か手前で藝者を無理に歸す。藝者は切りにもつと行くといつたが、彼には人々の待ち合せてゐる赤い電燈の下まで、自分と行く事が此若い女にどれ程の苦痛であるかが解つて居た。

間もなく彼は下町の或横丁に小ぢんまりとした名古屋普請の家を建てた。出來た時に彼は彼に最も優しかつた出たての若い藝者を落籍して妾とした。そして其時、三年経つたら手を斷つて其家を其儘やると云ふ事を申し渡した。

二十代の頃彼が馴染んでゐた遊女に二人の金持の客があつた。一人は金鑲を持つた四十五六の男であつた。一人は老舗の隱居で七十二歳の老人であつた。二人共其遊女を身受けしようと思ひ出したが、前に一度身受けされて懲りて

ゐる女は今度は自分でひくといつてそれを斷つた。が、暫くして女は急に現在の生活がいやになつた。女は俄に身受をして貰ふ事にした。其時女は七十二歳の老人の方を選んだのである。

いづそ、老い先の短い人を選ぶと云ふ事は此社會に普通な事で女に特別な惡意があるとは思はなかつたが、それを打ち明けられた時彼は寂しい氣がした。残つた年期とその餘生とを比較概算されてゐる老人を彼は心から憐んだ。

そして僅四十何年か経つた今、何時か其老人の立つた所に自分も立つて居たのである。——かう思つて、顧みれば四十何年も彼には僅としか考へられなかつた——

當時の彼はその事でかなり烈しく女を責めたが、今の彼は老人の死期を待つ若い女の心を責める事が出來なくなつて居た。けれども自分の死期が待たれると考へる事は流石に堪へられなかつたので、彼は妾に三年間と期限を切つたのである。三年目は七十二歳で丁度前の老人が遊女を身受けした年である。

妾は彼の一番上の孫娘と同年で、下ぶくれの眼のうつとりとした、肉づきのよい女であつた。

彼は木の香の高い明るい家に、總て新しい世帯道具に圍まれてゐると、不圖二十代か三十代の心持になる事があつた。それも初めの中だけで、やがて三年経つて彼は七十二歳になつたが、女と別れるのは堪へられなく寂しい氣がした。

女も情夫があつたにかかはらず、此老人と令、約束通り別れるのは何か慘酷な様に思はれた。のみならず何も彼も解つた老人と別れるのは、自分にとつて危険のやうにも考へられたのである。さうして義理からでもなく、もう一年此儘で居たいと申し出した。老人は喜んだ。

老人は火鉢を間にして女と向ひ合ふやうな時も、女の關節の所だけが少し凹んでゐるふつくりとした柔かい手の前に自分の皮の下肉の去つたかさ／＼した手を出す事が出来なかつた。彼はぢつと強く女を抱き締めてやるだけの力のない腕を悲しんだ。さうして、なぜ他の老人のやうに自分の心も老人らしくなつて呉れぬだらうかと悲しんだ。

一年は経つた。その間に女は男の子を生んだ。それが自分の子でない事はよく知つて居たが、彼は腹を立てる勇氣も……心に女を怨む事さへ出来なかつた。そして女はもう一年かうして置いて呉れと云ひ出した。それを聞いた時に老人の眼には涙が浮んだ。

次の一年には老人は死を願ひ出した。女は情夫の二人目の子を腹に持つた。彼は其情夫と云ふ若者を見た事がある。生き／＼とした見るから氣持のいい男であつた。彼は孫程の若者に對して嫉妬も起らなかつた。然しその子の生れる迄には死ねるやうに祈つて居たのである。

其内其一年は経つて、赤兒は生れたが、老人は死ねなかつた。そして今度は彼の方からもう一年と云ひ出した。女は快く承知した。

又その一年も終らうとする秋であつた。彼は風邪氣で床についたがインフルエンザで重態に變つた。女は本宅へ來て、彼の子供等や孫等と一緒に心からの介抱をした。一週間して彼は望み通り女や孫子の中で七十五歳で靜かに永眠した。

遺言によつて、女は其家の他に少からぬ遺産を受けて、二人の子供を育てる事になつた。

四月の後、嘗つて老人の坐つた座布團には公然と子供等の父なる若者が坐るやうになつた。其背後の半間の床の間には羽織袴できちんと坐つた老人の四ツ切りの寫眞が額に入つて立つてゐる……。

母の死と新しい母

十三の夏、學習院の初等科を卒業して、片瀬の水泳に居つて居た。常立寺の本堂が幼年部の宿舎になつて居た。

午後の水泳が済んで、皆で騒いで居ると小使が祖父からの手紙を持つて來た。私は遊びを離れて獨り本堂の縁に出て、立つたままそれを展いて見た。中に、母が懷妊したやうだと云ふ知らせがあつた。

母は十七で直行と云ふ私の兄を生んだ。それが三つで死ぬと、翌年の二月に私が生れた。それつきりで十二年間は私一人だつた。所に、不意に此手紙が來たのである。嬉しさに私の胸はワク／＼した。

手紙を卷いて居ると、一つ上の級の人が故意と顔を覗き込むやうにして、

「お小遣が來たね」と笑つた。

「いいえ」

答へながら、賤しい事を云ふ人だ、と思つた。

私は行李から懷中硯を出して、祖父へと母へと別々に手紙を出した。

——旅に出ると私は家中——祖父から女中まで何か土産を買つて歸らねば氣が濟まなかつた。仕舞には「今度はおよしよ」と云はれるやうになつた。それで矢張り買つて來る。と、祖母や母も「それ／＼うまい物を見立てて」と讃めた。

此水泳でも、來るとからそれを考へて居た。然し手紙を見ると「今度は特別に母だけにしよう」と急に氣が變つた。「褒美をやる」かう云ふつもりであつた。

江の島の貝細工では蝶貝といふ質が一番上等となつて居たから、それで頭の物を揃へようと思つた。櫛、簪、根掛け、簪、これだけを三日程かつて町嚙に見立てた。

片瀬も厭きて來ると、歸れる日が待遠しくなつた。

日清戦争の後で、戦地から歸つて來た豫備兵が自家にも二十何人か來て泊つて居ると云ふ便りが暫くすると來た。私は賑やかな自家の様子を想像しても早く歸りたくなつた。

二

歸ると、土産を持つて直ぐ母の部屋へ行つた。母は寢て居た。悪阻だと云ふ事で、元氣のない顔をして居た。

その部屋の隣は十七疊のきたない西洋間で、敷物もなく、普段は箆筒や長持の置場になつて居たが、片づけられて兵

隊が十何人か其所に入つて居た。其騒ぎが元氣なく寝てゐる母に一々聴えて来る。それが無いやだらうと思つた。

母は夜着から手を出して、私の持つて来た品を一つ一つ、桐の函から出して眺めてゐた。

——翌朝起きると直ぐ行つて見た。母は不思議相に私の顔を見つめてゐたが、

「何時歸つて来たの？」と云つた。

「昨日歸つたんぢやありませんか。持つて来たお土産を見ただせう」かう云つても考へる様子だから、私は其品々を父の机の上から取り下して見せてやつた。それでも母は憶ひ出さなかつた。

其時は氣にも掛けなかつたが、段々悪くなるにつれ、頭が變になつて行つた。そして暫くすると頭を冷やす便宜から母はざんざりにされて了つた。

病床を茶の間の次へ移した。隣室の兵隊が八釜しくてか、それは忘れた。若しかしたら其時はもう兵隊は居なかつたかも知れない。

大分悪くなつてからである。母が仰向けになつて居る時、祖母が私に顔を出して見ると云つた。ぼんやり天井を眺めてゐる顔の上に私は自分の顔を出して見た。傍で祖母が、

「誰かこれが解るか？」と訊いた。母は眸を私の顔の上へ集めて、少時、凝つと見て居た。其内母は泣きさうな顔をした。私の顔もさうなつた。さうしたら、母は途斷れく

に、

「色が黒くても、鼻が曲つて居ても、丈夫でさへあればいい」こんな事を云つた。

次に、根岸のお婆さんと云ふ、母の母が私のしたやうに顔を出して、自分で、

「私は？」と云つて見た。

母は又眸を集めて見て居たが、急に顔を壓めて、

「ああ、いや／＼、そんな汚いお婆さんは……」と眼をつぶつて了つた。

三

かかりつけの醫者は不愛想な人だが、親切で、其上自家中の人の體を呑み込んで居ると祖母などは信用しきつて居た。所が其二年程前、舊藩主の氣の違つた殿様を毒殺したと云ふ嫌疑で私の祖父等五六人と共に二ヶ月半此人も未決監に入れられた。それ以來どう云ふ理が縁を切つた。今は又かかるやうになつたが、母の病氣は松山と云ふ世間的には此人より有名な近所の醫者に診察して貰つて居た。然し祖母は何かとそれに不平があつた。殊にのつべりした代診のお世辭のいいのを不快に思つて居た。

病氣は段々と進んで行つた。絶えず頭と胸を氷で冷やした。

これも理由を知らないが、病床は又座敷の次の間へ移された。で、二三日するといよく危篤となつた。

汐の干く時と一緒に逝くものだと言して居た。それを聴くと私は最初に母の寝て居た部屋へ馳けて行つて獨りで寝ころんで泣いた。

書生が慰めに入つて來た。それに、

「何時から干くのだ？」ときいた。書生は、

「もう一時間程で干きになります」と答へた。

母はもう一時間で死ぬのかと思つた。「もう一時間で死ぬのか」さう其時思つたといふ事は何故か其後も度々想ひ出された。

座敷へ來ると、母はもう片息で、皆が更／＼紙に水を浸して屑を濡らして居た。――髪をかつた母は恐ろしく醜くなつて了つた。

祖父、祖母、父、曾祖母、四つ上の叔父、醫者の代診、あと誰が居たか忘れた。それ等の人が床のまはりを取巻いて居た。私は枕の直ぐ前に坐らされた。

散切になつた頭が括枕の端の方へ行つて了つてゐる。それが息をする度に烈しく揺れた。吾々が三つ呼吸する間に、母は頭を動かして、一つ大きく息をひいた。三つ呼吸する間が四つする間になり、五つする間になり、段々間があいて行く。蹶んで、脈を見てゐる代診は首を傾けて薄眼を開いて居る……。もう仕なくなつた。かう思ふと、暫くして母は又大きく一つ息をひいた。其度に頭の動かし方が穩かになつて行つた。

少時すると不意に代診は身を起した。――母はたゞせう

死んで了つた。

四

翌朝、線香を上げに行つた時、其處には誰も居なかつた。私は顔に被ふせてある白い布を靜かにとつて見た。所が、母の口からは蟹の吐くやうな泡が盛り上つてゐた。「未だ生きて居る」ふつとさう思ふと、私は縁側を跳んで祖母に知らせに行つた。

祖母は來て見て、

「中にあつた息が自然に出て來たのだ」と云つて紙を出して叮嚀に其泡を拭き去つた。

江の島から買つて來た頭の物は其儘皆、棺に納めた。

棺をめる金槌の音は私の心に堪へられない痛さだつた。

坑に棺を入れる時にはもうお終だと思つた。ガタン／＼と赤土の塊を投込むのが又胸に響いた。

「もうよろしいんですか？」かう云ふと、待ちかねたやうに鍬やシャベルを持つた男が遠慮會釋なく、ガタ／＼ガタガタと土を落して埋めて了つた。もう生きかへつても出られないと思つた。

母は明治二十八年八月三十日に三十三で死んだ。下谷の御成道に生れて、名をお銀と云つた。

五

母が亡くなつて二月程すると自家では母の後を探しだし